

美濃加茂市民ミュージアム

可 児 光 生*

岐阜県的美濃加茂市から来ました可児光生です。美濃加茂市民ミュージアムで館長をしています。博物館や美術館など呼び方はさまざまありますが、美濃加茂はミュージアムとっています。今日は、地域の博物館と子どもや市民の関わりについて話をし、最後に現地実習のイメージも少し捉えてもらうための話をします。

皆さんの岐阜県のイメージは、どうしても白川郷や飛騨高山といった雪国のイメージがあるかと思います。岐阜県はかなり広い県で、南はほとんど伊勢湾といえますか、海に近いところもありますし、北は北陸の富山に面している大きな県です。

私のいる美濃加茂市は、岐阜県の一番南に当たります。濃尾平野といわれる名古屋を中心とした平野部がありますが、その北の端になります。隣には多治見市があって、夏になると40度を超える記録的な温度を出す町です。冬は岐阜県内としては暖かい方ですが、夏は暑い地域です。名古屋から北へ30キロほどの小さな町で、人口は5万7000人ほどです。江戸時代にあった中山道といわれる街道と、大きな川である木曾川が交差するところで、昔も今も交通の要所です。

市民ミュージアムができたのは、2000年の10月です。来年で20年を迎えますが、博物館はできるのにすごく時間がかかります。ちょっと異例かもしれませんが、うちの博物館はできるのに17年間もかかりました。17年間の準備があったことで、私たちが博物館や美術館について考える時間がありましたし、市民の皆さんと話し

合う時間もできたので、結果的には17年間は無駄ではありませんでした。

2000年は、皆さんも受けた総合的な学習の時間が、試行の形でちょうど始まった年です。学校現場では、総合的な時間をどのように行うかは、かなり混乱といえますか、迷いもありました。博物館としても、学校の子どもたちに、どのように博物館を利用してもらったらいいだろうかという、その両方の思惑がいろいろとあって、そのときにできた博物館でしたので、おのずと美濃加茂のミュージアムは、学校との関わりを一つのテーマといえますか、柱にしています。ちょっと変わっているのは、「教育センター」といわれる学校教育の施設で、学校に行けない不登校の子どもたちや教科研究、教員の研修をするスペースが一緒になっています。ここへ学校の先生たちも頻繁に来て活動するので、先生たちにとってもなじみのある場所になっています。

施設について簡単に説明をします。もちろん展示室や収蔵庫はありますが、その他に、実習をするための実習棟や民具の展示館、まゆの家といわれる昭和30年代の暮らしを復元した建物があります。そこで、子どもたちにいろいろと授業を展開しています。最後に宿泊アトリエ棟です。ミュージアムでは、現代美術の作家を中心に、ここに滞在をして、制作をする美術館としての活動もしています。作家の人たちが宿泊をして、考えを巡らせて、いろいろな制作をするようなこともしているので、その作家の人たちが泊まることのできるアトリエ棟といわれる宿泊施設も持っています。最後に話をするつもりですが、皆さんもし来られる場合には、こ

*美濃加茂市民ミュージアム館長

の宿泊アトリエ棟に泊まって、実習生活をしてもらうことになります。

経営は、美濃加茂市の直営の施設です。博物館の言葉でいえば地域総合博物館で、いろいろなジャンルが関わっています。具体的には、考古学や歴史、民俗、美術、博物館学で、その担当をする学芸員が5名いて、いろいろな分野にわたって活動をしています。毎年の年間入館者は、9万人ほどです。

航空写真を映していますが、森の中にあって、9ヘクタールとかなり広い敷地です。真ん中の濃い緑のところは、ヒノキの植林をした所です。周辺の黄緑のところは、もともとある里山を残していて、自然豊かなところですが、森の周辺は、ほとんどが住宅地になっているので、現在はここだけが島のように自然が残っています。森の中は昔の人が住んでいた住居址といえますか、遺跡になっています。写真の変なテントになっているところは、昔の人が住んでいた竪穴式住居のおおい屋根です。皆さんも社会の授業で習ったのではないのでしょうか。まだ実際に残してあるところも学習に使いますし、地域の歴史を考えるとときにも参考にしています。

次が生活体験館です。このような家は、もう日本では数少なくなっていました。昭和30年代には、神奈川県このあたりも盛んだったようですが、岐阜も養蚕が盛んでした。当時の養蚕で使われていた建物を移築ではなく、復元の形で造っています。ここに縁側、障子、仕切りや土間といった、かつて日本の家屋に普通にあったものが復元されています。

次に映しているのが、実際に作家の方が来て、森の中で絵を描いている風景です。平面の作品も作られますが、彫刻などもあって、ジャンルは多岐にわたっています。インスタレーションといいますか、この森を使った自由な表現活動を行うようになっています。

当館の考え方には、四つあります。これは17年間の準備期間に考えてきた結果としてつくられたもので、どのような方向で行っていくかを

考えたものです。

一つ目は、自然との共存です。今、見てもらったように博物館は里山にあるので、自然から学ぶことの大事さを知ってほしいです。二つ目は、学校と連携をしようということです。博物館のものを生かして、博物館の活動はより深い学びのある場になるわけですが、それだけではなく、将来にわたって、幅広くずっと続けられるような子どもになるというとの考えで始まっています。博学連携という言葉を使っています。三つ目は市民の皆さんに参画をしてほしいということです。市民の皆さんの自由な発想と自発的な気持ち、博物館の大きな力になります。最後が、交流と地域です。これは公立の地域博物館であれば、当然のことかもしれませんが、あんまり堅い考え方ではなく、枠を取り払って、もっと自由に博物館を見てもらい、地域にとって、必要な文化的交流の拠点となりたいとの気持ちで行っています。開館から19年がたって、どれだけ目指す姿に近づいているかは、なかなか難しい点もありますが、これらの柱を元に活動をしています。

理念の二つ目の学校との連携とのことで、子どもとの関わりについてくわしく話をします。昨年の例ですが、年間9400人の子どもたちが学習で訪れています。皆さんの中にも、小学校のときに近くの博物館へ行った方もいるのではないのでしょうか。全国的に冬になると、ちょっと昔の道具たちをテーマに、学校の子どもたちが博物館に来る期間があります。他にも社会見学や、遠足で利用した方も多と思います。美濃加茂では、それを特別な活動ではなく、年間の授業のカリキュラムに位置づけて活動することが、一つの特色です。

小学校の利用が9割ほどで一番多いです。6年間で来場した回数を聞いてみると、11.3回です。切り上げると12回なので、1学年で2回訪れている計算になります。長い準備期間中に学校の先生から、博物館に行きたいけれども、足がなく、子どもたちはどのように行っ

たらしいかとの要望がありました。それを受けて、当館ではバスを用意しています。このバスは、学校と博物館の間を利用してもらうだけではなく、博物館から市内の現地へ行く学習でも活躍をしています。

昨年度末に卒業をした子どもたちに、6年間を振り返ってもらいました。古井小学校といわれる学校では、12回の利用がありました。低学年のときには、生活科や図工が多いですが、中学年や高学年になると、社会や理科の授業が目立っています。その中で、5年生の理科での「流れる水の働き」を見てみると、博物館で習った後に現地へ行く形が多く見られます。6年生での「大地のつくりと変化」でも、岩石標本などの展示を見た後で、実際に現地に行く活動をしています。学校から違う場所に行くので、気持ちが高揚するといいますが、ちょっと落ち着きがなくなるのが普通ですが、6年間で12回も活動をしているので、6年生ぐらいになると、スキルが付いてくるといいますか、博物館の使い方が分かってきます。特別な活動ではないわけです。

さきほど少し話をした地域の視点でいえば、博物館には標本や発掘をした資料がいろいろとありますが、それだけではなく、実際に子どもたちの身近の地域にあるものを資源として、教材として使おうとしています。理科での大地のつくりの授業では、ミュージアムで地質の標本を勉強した後に、実際に地層が出ている露頭や、化石が出ているところに行って、学びを深めていきます。古代の歴史の授業では、ミュージアムの中で発掘をした考古資料なども観察をしますが、その後で森の中へ行って、遺物探しや当時の家の跡を観察します。さらには、自分たちの家の前でも物が拾えるわけです。これは田舎だからできることかもしれませんが、そこで実際に奈良時代のもを見つける子どもたくさんいます。子どもたちは、歴史の勉強をすると、奈良時代は奈良でしかない、鎌倉時代は鎌倉でしかないと思ってしまいがちですが、実は身近

なところに自分たちの歴史があることを、地域学習を通して勉強をしています。

学習を支える体制は、教員、学芸員、担当する学習係、ボランティアの4者が協力をして、子どもたちに当たります。チームティーチングといわれる形で役割分担をしながら行います。ボランティアの皆さんにとっても助けられています。111名の登録があります。全て無償ですが、内容によって6個の分野に分かれ、昨年度に支援をもらったボランティアの数は、延べ260名を超えました。ボランティアの年齢や性別、経歴はさまざまで、多様な立場や視点で子どもたちに関わってくれています。ボランティアも含めて、館内の職員なども、子どもたちから学ぶところはいっぱいあります。

スクリーンに示しているのは、ある日の授業の光景です。子どもに対して、周りを取り囲んでいる大人のほうが多いです。この周りを囲んでいる大人たちの中に、学校の先生や学芸員、ボランティアがいます。子どもたちの様子の1コマですが、発掘をした昔のものを実際に手に取ったり、土器の破片をじっくりと観察したりしています。目がきらきらしています。発掘をした、立派で、しっかりとした形の遺跡の遺物だけではなく、破片を見ることによって、子どもたちも当時のイメージをかなり深めている感じがします。

先ほど言った生活体験館まゆの家では、昔の調理場も復元されていて、昔のかまどを使った体験もしています。なかなか火がつかなくて、子どもたちはうまくいかないわけですが、その失敗も含めて、彼らは勉強をしています。キャンプファイヤーなどをのぞいて、今は火を使わない生活になって、自分の家もIHとなって火を見ませんが、果たしてこれから火を人間が使わなくなっていってしまうとどうなのかは、ちょっと心配をしています。このような体験は、子どもたちには貴重なものになると思います。

6年間の活動をする、その子どもたちに

アンケートを採ります。毎年、実施をしていて、10年以上しています。私たちは、その変化を気にしています。子どもたちが6年間の活動を通して感じたことや、子どもたちが博物館を利用した後にどうしたのかといった行動の広がり把握するために行っています。

当然ながら、子どもたちは学校とは違う何かを感じています。私たちは博物館は学校での授業を補うだけではないと考えています。ここで、学校ではない博物館ならではのものを体験してほしいです。子どもたちの声を聞くと、「うわっ、昔のものにさわっている」、「何だかぞくぞくとした」など、いろいろな発言が出ますが、学校の勉強とは違った形で考えることができているようです。

子どもたちは、学ぶ際に学芸員やボランティアなどのスタッフに出会います。子どもたちから、考古学者の方はすごいとの話や、ボランティアの人がアドリブを入れながら一生懸命に説明をしてくれて良かったですとの感想も出ています。子どもたちにとってみると、研究をする人がいるのだということを、この博物館の活動を通して知ります。ボランティアの人たちが無償で働く意味について、最初は意味が分からない子どもも多くいました。最初は想定をしていませんでしたが、博物館では子どもたちが実際に人から学んでいるのだということを感じます。ある意味で、キャリア教育でもあります。

卒業生アンケートでは、子どもたちの行動の変化も取っています。博物館に来てから、その後にしたかを調べています。最初にするのは、家族に話をしたことがあるかどうかです。何か心に残ったことがあるから家族に話をしようとのことで、その割合を調べています。その他には、夏の自由研究に生かす、博物館の学習の後で行った現地に、もう一度行ったことがある、博物館へ来てから、よその博物館にも行ったことがあるなど、それを数字で表しています。授業は、学校から見たら大事な1

コマですが、私たち博物館から見たら、最終目標ではなく、通過点であると考えています。博物館での活動は、子どもたちにとって、その後の暮らしに変化をもたらすきっかけになってほしいです。

他の博物館へ行ったことがあるのは、8パーセントぐらいです。この数字が低いのか高いのかは分かりませんが、実際に40名もの子どもたちが美濃加茂のミュージアムに来てから、ほかへ行ったことがあるのは事実です。このような子どもたちが増えていけばいいと感じています。

アンケートの結果についても一つの気になる話をします。昔のものなどを大切にしていることや、貴重な体験をさせてくれる場所、私の住んでいる美濃加茂に素晴らしい建物があることを誇りに思うとの感想もありました。最初は当たり前だと思っていたことを6年生になると、これはすごいことであると感じるわけです。他には、この施設は、美濃加茂の一つのシンボルだと思いますと書いています。これは私たちをちょっと喜ばせてみようとの心があって、付度の気持ちが働いているのかもしれませんが、彼らが純粋にこのようなことが気になり考えていることがうかがい知れます。住んでいる地域や社会に対する意識の芽生えが、6年間の活動を通じて出ている感じがします。

最近では、シビックプライドといわれる言葉が使われることがあります。地域を愛する精神です。博物館での活動を通して、住んでいる美濃加茂の地域への誇りが育っていくといいと思います。子どもにとってみると、博物館は地域にあるものやコト、ヒトを意識して、いろいろなイメージや考えを膨らませることのできる場です。一方、博物館側にとってみると、利用をする子どもたちは、そのときだけではなく、将来も併せて、ずっと文化や学ぶことに親しんでほしいわけです。子どもではありますが、一市民として考えてみたいと思っています。

映しているのは、ミュージアムにやってきたお母さんの姿です。お母さんは昔、ここで勉強

をしていたことを、生まれたての子どもに話しかけている風景のようで、とてもほほ笑ましい風景です。自分の子どもが生まれたら、この施設に連れていきたいと思ってもらえるような活動ができたら最高であると感じています。

これまでは子どもの話でしたが、ここからは大人の話をしていきます。市民の関わり方とのことで、理念の3と4です。市民参画と、交流と地域について話をします。

ボランティアは、111名の登録がある話はしましたが、6個の分野があります。学習支援や展示、生活体験、アート、伝承料理、イベントです。それぞれの関わりはありませんが、それぞれの領域でのボランティアの皆さんがいます。

お金は一切、払っていません。報酬はゼロです。報酬を払うことも考えましたが、ボランティア制度が失敗をする一番大きな理由は、お金です。例えば、交通費や食事代を払うと、そこに不公平感が生まれて失敗する例をいろいろな所で聞いているので、全て無報酬でお願いをしています。それについて理解してもらえる人だけに関わってもらっています。

ボランティアも一つの組織になってしまうと、代表者を選ぶ時にもめるようなことも聞いているので、連絡係の世話人は、毎年変えることにして、組織化をしないことにも気を付けています。建物の中には、ボランティアの人のための部屋があって、そこで打ち合わせや休憩、反省会をしています。

ミュージアムには、ボランティアの他に、各市民活動の団体があります。皆さんも教科書で習ったかもしれませんが、坪内逍遙という近代の文学者で、教育者で、シェイクスピアを訳した人として有名な人がいます。その人が美濃加茂で生まれていることがきっかけで、いろいろな活動が生まれています。朗読を広めたのも坪内逍遙です。朗読団体である声のドラマの会や、顕彰会にも関わってもらっています。その他にも自然史に関する研究会や、きそがわ日和

といった、美濃加茂の木曽川の名前から取ったものですが、主に現代美術に関わっているアート系のNPO法人などの団体も一緒になって、ミュージアムの活動を進めています。また、坪内逍遙と同じく美濃加茂にゆかりのある歴史学者の津田左右吉の2人は、早稲田大学と関係があって、早稲田大学と連携を取って、展示に関しての共同企画や、学生の演劇といった形での関わりをずっと持っています。

ボランティアの中にある伝承料理の会について少し話をします。当館ができる前に関係者にこちらから呼び掛けて、地域に伝わる料理を地域文化として捉え、ミュージアムとしても研究調査をして広めていこうとの方針の下で、準備の段階から一緒に活動をしました。現在は、会員が35名ほどです。

年間を通じて、「四季を食べる講座」といわれる名前で、市民の皆さんに集まってもらって、試食と話を聞く会を設けています。その他にも、年に1回程度、特別講座を企画しています。これは当館で行っている企画展や事業に関連して、ボランティアさんが考えて、テーマを持って深めてもらうことを行っています。最初は、講座でレシピを配っていましたが、何回も重ねるうちに前のレシピが欲しい人も現れたので、それをまとめて『おばあちゃんちのおかって』といった冊子にして、発行をしています。現在は第4集まで出ています。

この伝承料理の会の活動を紹介しますと、2010年に、「漬物フェスティバル」を行いました。通常行っている四季を食べる講座で、いつもボランティアの皆さんが自宅で作っている漬物を持ち寄っていました。それはどのように作るのか、自分のうちのものとはちょっと違うといったことが話題となって、その話を聞いていた当時20代の女子学生が関心を持ってきて、それは面白いからもっと教えてもらおうとの話になりました。それをきっかけにして、どのうちでもある漬物をみんなで持ち寄って、面白さを楽しもうとのことで、企画がされました。

まずは調査から始まりました。どちらかといえば若い方の関心が高かったです。年配の方から見ると当たり前のものですが、そのような方への聞き取りをしました。さらに、漬物を作る材料、野菜や畑にまで関心が広がって、地域環境まで話が広がってしまうぐらい楽しい調査になりました。最終的には、その内容も発表がされました。それぞれの家から43種類の漬物が持ち寄られて、展示試食が行われました。

その結果については、報告といいますが、新しいレシピ集を作りました。博物館は、調べたことの結果を蓄積するところに意味があります。これはイベントではありますが、イベントにとどまらずに後に残すとの気持ちで蓄積をして、残していく活動を意識的にしています。これも漬物だけの特集を組んで、『おばあちゃんちのおかって』の番外編として販売をしています。1冊150円です。イラストも含めて全て手書きで、作るのには時間がかかりかかりますが、温かみのある本とのことで多くの方に好評です。漬物にする大根を収穫しているところを調べたり、年配の方々からも調査をしたりして、43種類の漬物が集まりました。伝承料理の会では、このほかに特別講座をしていて、この写真は60年前の結婚式のごちそうについてメンバーで相談をして、テーマを見つけて調査をして、再現をした風景です。

今は伝承料理の話でしたが、他にもいろいろと市民の方に関わってもらって、一緒になって活動を進めています。市民の皆さんによる史跡現地巡りをしています。何気なく通り過ぎてしまうようなものも、実は地域の人たちが知っていることは、いっぱいあります。現地巡りを通して、地域の皆さんが知っていることを伝える活動もしています。坪内逍遙という人物。人物もある意味では、一つの大きな資源です。それを生かした朗読劇の発表や、坪内逍遙を生かした野外演劇も行われています。

美術の領域では、みのかも Annual というものを実施しています。Annual とは、毎年とい

う意味です。毎年、アート系の催し物を行っています。森の中を使つてのインスタレーションです。平面の油絵や日本画ではなく、森の中を使つて、森の自然を生かしながら行います。春先に3日間限定で行います。3日間限定なので、とても思いきった展示ができますし、実験的な取り組みを意欲的に行ってくれています。毎年、50組ぐらいの作家が集まって、楽しい3日間になります。この写真は、アート系のNPO団体のきそがわ日和と一緒に、森の中を使つて、陶製の風鈴をかけて、市民と一緒に楽しむ森の音といわれる企画をしたときのものです。

市民の関わりではありませんが、地域の資源を生かすとの意味で、少し話をします。鉱物と化石「なぞと美しさ」という展覧会をしたときに、確かにテーマは堅苦しいものですが、市民の皆さんにももう少し親しみを持ってもらおうと考えました。ミュージアムにはカフェがあって、展覧会に合わせて新しいメニューやスイーツを考えていますが、このときにもスイーツを考えてもらいました。地層をイメージしたパウンドケーキや、ピカリアといった昔の化石をモチーフにして、長いコルネのようなものを作りました。ジオ菓子といわれるものを作って、地域の資源を少しでも多くの人に楽しんでもらう企画も進めました。

このように、多くの市民の皆さんに関わってもらっていて、多様な皆さんの関わりによって、多様なミュージアムの活動になっています。何といても地域資源の発掘の担い手は市民の皆さんですし、それが市民ミュージアムとしても大きな力になっています。無限の可能性があります。博物館に対する固定概念や、既成概念にとらわれない自由な発想を持っている市民の皆さんをこれからも大切にしていきたいです。市民の皆さんには、自分たちも何か関われるのだ、何かをつくり上げてもいいのだという知的な空間として、ミュージアムを使ってもらいたいです。

博物館や美術館は、一般的には、地域のものを集めて、守って、調べて、展示や教育などを通して、広く伝える場としての機能はわれていますが、本来はたまたま集めたものであって、物や出来事はそれぞれの場所にあるものですし、あったものです。私は、身近な所にある資料や資源を通して、地域の良さが分かってくる場所にミュージアムはなればと考えています。ミュージアムは、関わる人々や、そこにある資源を生かして、地域の文化をつないでいきます。つながりだけではなく、つくっていくハブのような存在であると思っています。

最後に、実習のイメージを話します。ミュージアムを中心とした地域の生かし方を、美濃加茂で体感してもらえれば、と考えています。具体的には、前半に言ったように子どもたちの活動です。授業としてほとんど毎日、訪れています。時には、1日に2校が来ます。その子どもたちの活動として、特に地域の関係する活動と学習を見守って、サポートをします。子どもたちはここへ来て、いろいろなことをつぶやいています。「えー、やばい」などと言っています。その声には、彼らの学びの瞬間があります。その見守りをしてほしいですし、いろいろな意味でサポートをしてもらいたいです。紹介をした伝承料理の会は、地域の食事についての調査も考えられないかと思っています。そのサポート

や、まとめをする作業もあります。

今日はこれまで話をしませんでしたでしたが、この地域には古い家がたくさんあります。これは地域にある大正初期の建物です。現代美術に関わるアーティストは、このような建物にすごく興味関心を持ちます。この古い民家から出るパワーを使って、何かを表現してもらえないか、この建物を使って何かできないか、具体的に動き始めています。そのアーティストに関わるワークショップなどのサポートといいますが、皆さんも一緒に体験してもらったら楽しいのではないかと考えています。

それから、登録文化財について、国の重要文化財ではありませんが、近代の文化財として活用されているものがあります。美濃加茂には昔の村役場が残っていて、そこは今、カフェになっています。カフェに展示をしたり、昔の民具を調べたりする作業もあるかと思います。

ミュージアムのカフェの話をさきほどしましたが、ミュージアムグッズも多く作っています。単なるお土産品ではなく、ミュージアムのいいところを表現する形で作っています。そのカフェのメニューや企画についても、何らかの関わりを持ってもらうことを想定しています。

以上、美濃加茂のミュージアムの行っている実状と、最後に現地学習のイメージの話をしました。ありがとうございました。

〔解説〕 博学連携と市民との関わりへの着目

美濃加茂市民ミュージアムは、しばしば、博物館関係の図書や雑誌、博物館関係者のための研修で紹介されてきた博物館である。とりわけ、「地域との関わり」や「博物館教育」というテーマにおいて、知られていると言ってよいであろう。美濃加茂市民ミュージアムの活動は、可児氏の説明にあった4つの理念と分かちがたく結びついているように捉えられるが、特に、可児氏が取り上げたように、博学連携と市民との関わりは、特徴的といえよう。

博物館と学校の連携は、「博学連携」として、盛んに取り組まれているように見られるが、いくつかの課題も指摘されてきている。博学連携は、博物館が学校教育にどう役立つかばかりが問われるきらいがある。すなわち、連携というよりも一方的な貢献であり、学校教育の文脈で、学習評価や利用が考えられ、博物館における学習の独自性が尊重されていないことや、学校教育に役立つことばかりに存在意義を見出すことは本末転倒であることが、しばしば言われている。

可児氏の講義からは、美濃加茂市民ミュージアムがこれらの課題を意識していることが読み取れる。それは、博学連携について、「学校での授業を補うだけではない」、「学校ではない博物館ならではのものを体験してほしい」、博学連携での学習は「私たち博物館から見たら、最終目標ではなく、通過点である」という発言から、明らかであろう。講義で言及されたアンケートのように、学校教育の評価とは異なる形で、児童生徒の学習を読み取ろうとしていることも、その意識の表れと理解できる。

一方、博学連携が学校教育のカリキュラムに位置づいていることも特徴的であると言える。博物館には、授業の単元に合わせたワークシートなどの教材を公開しているところがある。し

かし、美濃加茂市民ミュージアムでは、長期的で複数回にわたる利用が想定され、教員等を交えた内容の検討が、活動の前提となっている。当然、その背景には、学校の教職員が博物館に対して理解があるような環境が作りだされていることも特筆すべきであろう。

可児氏が強調したもう一点が、市民との関わりである。可児氏の説明では、設立準備に17年をかけたとされ、「市民の皆さんと話し合う時間もできた」という。美濃加茂市民ミュージアムの名称が「美濃加茂市立博物館」ではないことから、開館前から市民参画が意識されていたと考えられよう。

特に重視されていると考えられるのが、ボランティアとの活動であるが、可児氏が、ボランティアの「組織化をしない」という考え方を述べているのは、興味深い。美濃加茂市民ミュージアムの職員はボランティアとどのように関わっているのか、ボランティアをどのように捉えているのか、という点も、美濃加茂市民ミュージアムを理解するためには不可欠であると考ええる。

なお、時間の関係で、講義では説明されていない取り組みも多い。たとえば、「ミュージアム・ステーション」として、地域に関する情報を収集・整理して、ウェブサイトで公開しているなど、地域の情報拠点というべき活動をしていることは、一見の価値があろう。

地域実習では、博学連携や市民との関わるの場に積極的に参画することが期待されるが、可児氏の説明では、それらの機会が得られるよう、ご配慮いただけるようである。美濃加茂市民ミュージアムでの実習は、博物館と「コミュニティ」の関係を考える貴重な機会となるに違いない。

(仲村拓真)